

お彼岸にちなんで

今年も春のお彼岸の季節になりました。日本国中あちらこちらで、多くの方がお寺参りや、お墓参りにいそしんでおられることでしょう。ここで、彼岸また彼岸会の本当の意義、真精神というものを考えたいと思います。

春秋執り行われる彼岸会という行事は、聖徳太子のおられた時分に始まったと伝えられていますが、日本独自の仏教行事です。本来は、この昼と夜の時間が等しくなる好時節に仏の教えをいよいよよく聴聞して、仏道精進に励むことでもあります。しかしながら、それが時代と共に日本古来の先祖崇拜の習慣と交わって、先祖供養の法要や、墓参りをすることというふうに変容してきたのであります。

そもそもこの「彼岸」というのは、彼(か)の岸、つまり悟りの世界のこと、我々人間が住んでいる此(こ)の岸、これを此岸(しがん)といいます。この煩悩にまみれて苦しみが多い世界から、仏の教えを聞き、精進して、その苦しみ迷いの世界から、その苦しみ迷いを離れた悟りの境地に渡ることでもあります。

仏の教えの目的は正にここにあるのでありまして、此の娑婆(しゃば)世界(娑婆というのは苦しみ多く耐え忍んでいかなければならない、この我々人間が現に生きている世界のこと)に住んでおりながら、その生老病死のどうにもならん様々な人間苦を通して、仏の教説に出会い、親しみ、聞き続けていくことによりまして、ようやくその苦しみ、迷いから出で離れる境地を頂くことでもあります。

そういう人間にとって根本的な大事なことを、この彼岸の好時節を機縁として、気づき励んでいくのが本来の彼岸会の意義です。

しかしながら、現状はお寺参りしてお経をお坊さんにあげてもらって、またお墓参りして先祖供養をしておしまいというのが多いと思います。

お墓参りして先祖を偲ぶことは何も悪くありません。自分が今こうして生きているのは、先祖あつてのことですから・・・。

しかし、厳密に真面目に考えますと、今こうして生きているのは、例えば私でいいましたら、名倉家の先祖といった〇〇家というきわめて限定された先祖のお蔭だけで今があるのではなく、私の今こうして生きているいのちの源をたどれば、父と母、そのまた父と母、そのまた父と母、そのまた父と母・・・・・・と、どこまでもたどれるのであり、そしてそれは人間の出現以前にもさかのぼり、恐竜時代にもさかのぼり、生命誕生までさかのぼり、そして果てしなく宇

宙そのものの始まりまでさかのぼるのです。これは何も大袈裟なことではなく、この身に賜っている事実であります。いうなれば、果てしない永遠のいのちの連続性のバトンを受け継いで、今こうして息をして生きているのであります。

さらに、この身を生かすために、どれだけの他のお命を頂いていることでしょうか。お米、お野菜、お肉、お魚等々、数え上げたらきりがなほのお命が私の肉となり、血となり、骨となり、内臓となり、エネルギーとなり、様々な働きとなり、力となり、このようにして命を保っておるのであります。

さらに、こうして生きているということは、お日さん、お月さん、引力、空気、水、はたまた様々な方々の直接縁がある人も、ない人も、その有形無形のお働き、お力、お慈悲、お心が働きとおして私に影響を与えて、そのお蔭を蒙っておるのであります。

本当に考えてみましたら、自分が生きているということ、存在しているということそのものが、時間的にも空間的にも、目に見えるもの見えないものの無数のはたらきによっているのだ、何と不可思議なことだ一と感嘆するのであります。

従いまして、狭い意味での限定されたわが先祖の供養ということだけで済ましてしまうのは、全く仏の教えから逸脱してしまっていますので残念なことです。ですから、坊さんもそうでない方も、我々人間に願われている根本的な大事な気づきのために、この彼岸会の本当の深い意義というものを学び、回復していくことが肝要と思います。

ここで親鸞聖人の語録であります「歎異抄」第五章の一節を記しておきます。『親鸞は、父母(ぶも)の孝養(きょうよう)のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらはず。そのゆへは、一切の有情(うじょう)はみなもて世々生々(せせしょうじょう)の父母兄弟なり。・・・』

親鸞は父母の追善供養のために、念仏したことは一返もない。それはなぜかという、一切の有情つまり生きとし生けるものはすべて皆、長き世をかけていのちのつながりの連続の中で生まれ死に、それを繰り返してきているのであり、それは本当に自分にとって広い意味で父母兄弟である。皆つながりの中で生きてきているのだ・・・、という意味になりましょうか。

だから仏の教えを、どこまでも深く厳しく身に引き当てて尋ねられた親鸞聖人は、亡くなった父母のためにその追福を願いこちらから供養をするためにお念仏することはせられなかったのであります。私どもも、亡くなった身近な人をはじめ、本当に広い意味での生きとし生けるものと同じいのちを頂いている一人として、今生きているそのものの深い意義というものを、それこそこの彼岸会に限らず毎日油断なく、問い尋ねていくのが仏道であると思います。合掌(ご質問・ご意見をどうぞ下さいませ。 mikinakura@nifty.com まで。)